

キャリア教育における文章表現

——指導と実践の報告——

北原 泰 邦

はじめに

近年、大学・短期大学、高等専門学校、専修学校などの高等教育機関において、「キャリア教育」の導入が急速に進んでいる。その背景としては、社会構造が複雑化・多様化するなか、終身雇用や新卒一括採用といった慣行的な雇用環境が見直され、その一方で非正規雇用者が増加して、若年層のフリーターやニートが社会問題化していることなどが挙げられる。総務省統計局の「労働力調査」によれば、十九歳から三十四歳までの年代におけるフリーター数は170万人、若年無業者は60万人以上というデータ（平成23年）が報告されており、とりわけ若者の職業・就業意識の向上が喫緊の課題となっている。

こうした現状の中、文部科学省は、平成18年12月改正の「教育基本法」において、教育目標の一つとして「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」を掲げ、社会的に自立するための職業意識の向上を目標とした。この方針をふまえて、平成20年7月閣議決定の「教育振興基本計画」では、「今後10年間を通じて目指すべ

き教育の姿」として、以下の項目を掲げている。

- ① 義務教育修了までに、すべての子どもに、自立して社会で生きていく基礎を育てる
- ② 社会を支え、発展させるとともに、国際社会をリードする人材を育てる。

この理念のもと、今後五年間、「特に重点的に取り組むべき事項」の一つとして、「キャリア教育・職業教育の推進」と生涯を通じた学び直しの機会の提供の推進」の項目を設定し、キャリア教育の推進のために、学校と地域社会との連携や職場体験活動を取り入れることを提唱した。また、大学・短期大学、高等専門学校、専修学校など、高等教育機関における実践的な職業教育を促し、専門的職業人や実践的・創造的技術者の養成を推進する方向性を示した。また、個人のキャリア形成や地域活動への参画のために、高等教育機関での社会人の生涯教育の環境整備の必要性を挙げている。

大学全入時代の到来とともに、大学・短期大学では、高い教養と専門性を習得する本来の教育過程に加え、いわゆる（出口）となる就職のためのキャリア支援カリキュラムを導入する傾向が強まっている。人文科学系の学校では、国文科・英文科などの専門性を打ち出した学科名称から、資格やキャリアを重視した実務的・実践的な名称に変更される傾向が見られ、大学・短期大学など高等教育機関そのものの機能が大きく変容しているといえる。たとえば、不況に強い実務性の高い資格取得を目指すカリキュラムを設置したり、社会・企業から要請されている実務的能力を伸

ばそうとしたり、また学生個々の性質を自己分析させてキャリア適性を見極めさせたりなど、キャリア教育を基盤とした教育内容が増加しているのである。

このように、大学・短期大学におけるキャリア教育導入の流れは、近年の社会不況の現状と相まって、専門性・教養性を習得する教育過程そのものを変容させ、高度な専門性を旗印にした大学機関でさえも授業における指導内容にキャリアアップのための方法を導入する傾向にある。一方でそれは、「キャリア教育支援」の名を借りた「就活テクニク」の伝授に留まる可能性や、「就活マニュアル化」した学生を多く生み出す危険性を併せ持っている。しかし、若者のコミュニケーション能力や日本語読解能力・文章表現力の低下が叫ばれて久しい昨今の状況下では、「キャリア教育」を導入するメリットも大きいのではないかと考える。

例えば、日本語表現能力やコミュニケーション力を要請する教養課程の授業では、正確で的確な表現力・理解力・整理力などを修養することで、就職活動で必須となる〈履歴書〉〈エントリーシート〉〈作文〉〈面接・討論〉などに直結する表現力を身につけることができる。また、従来の大学での専門教育における「読み・聴く」中心の授業スタイルも、「話す・書く」を中心とした「キャリア教育」の実践的方法を意識的に取り入れていけば、プレゼンテーション能力や資料・文献整理能力などが自然と身につく、社会人として必要な実践的キャリアの養成にも効果的である。さらに、職業体験や地域の企業とのインターンシップなどの経験をカリキュラムに取り込むことで、その経験と授業内容とを有機的に関連づけて、進路への関心・意欲をより高めていくこともできよう。

文部科学省は、平成18年11月の協力者会議において、「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き」の中

で、「キャリア教育」で身につけるべき力として以下の項目を挙げている。

- (1) 人間関係形成能力（自他の理解能力とコミュニケーション能力）
- (2) 情報活用能力（情報収集・探索能力と職業理解能力）
- (3) 将来設計能力（役割把握・認識能力と計画実行能力）
- (4) 意思決定能力（選択能力と課題決定能力）

急激に変化する情報社会においては、自らの意思と責任で職業・進路を決定し、社会における「生きる力」を育成していくことに「キャリア教育」推進の意義があり、そのために必要なコミュニケーション能力をどのように養成していくのか、その具体的方法が今まさに問われているのである。

そこで本稿では、大学・短期大学の授業において、日本語コミュニケーション能力の向上のためにはどのような方法が有効なのかを考察し、論者の担当する「日本語文章能力」指導の実践的方法を紹介してみたい。

一 言語コミュニケーションにおけるキャリア教育の方法

「日本語文章能力」指導の実践として、論者の勤務校である信州豊南短期大学言語コミュニケーション学科での取

り組みを紹介する（平成24年度現在）。本学科では、その教育目標に社会人としてのキャリア形成のために必要となるコミュニケーション能力の育成を根幹に据え、次のような人材の育成を目標に掲げている。

- 1 ことばや情報による豊かなコミュニケーション能力を持つ人材の育成
- 2 適切な判断力をもつ自立した人間の育成
- 3 資格やスキルを活かして社会で活躍できる人材の育成

この目標のもと、キャリア教育養成のために必要な〈基礎プログラム〉と〈専門プログラム〉のカリキュラムが構成されている。〈基礎プログラム〉では、「コミュニケーション能力」「日本語・英語の運用能力」「パソコンを駆使した情報活用能力」など、社会人のキャリアとして必要な能力を養成する授業が行われている。また、〈専門プログラム〉では、司書・文学・心理・英語といった専門領域の科目とともに、社会人として必要な実践的スキルである「資格取得・キャリア支援」科目を開講している。

資格取得プログラムとしては、ビジネス文書検定2・3級、秘書検定2級、ファイナンシャルプランニング2・3級、医療事務技能2級、ITパスポート、簿記3級、色彩能力検定3級などの資格取得を目指した講座があり、社会での実践的な場で活用できるキャリアを学ぶ機会となっている。また、〈基礎プログラム〉の中には、「自分を知る」「企業と社会」「コミュニケーションスキル」「ビジネス演習」などの科目があり、自己分析や、プレゼンテーション能

力、ビジネスマナー、ビジネス文章などの実践的授業を通し、社会におけるキャリア適性を見極めて目的意識を明確にし、そのために必要となる自己表現の方法を習得させることを目指している。これらのプログラムは、学生個々のコミュニケーション能力を向上させ、進路決定に至るキャリアデザインを各自が構想して社会的自立を促すものとなっている。

こうしたコミュニケーション能力やキャリアプログラムの目標達成のためには、当然ながら基礎的な学力のレベルアップが必要となる。そのためには、言葉を正しく理解し、的確に表現できる「日本語表現能力」の向上が必須となる。そこで、本学科では国語・英語の基礎的学力のレベルアップのために、平成19年度からレベル段階別の授業スタイルを導入し、個々の学習能力の向上を目指した授業を展開している。なかでも、「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」（Ⅰは前期・Ⅱは後期科目）を一年生の必修科目として学生の能力に応じたレベル分けを行い、文章指導を中心とした少人数クラスでの授業を展開している。

授業の概要は以下の通りである。

まず、入学後、新入生全員に「プレイスメントテスト」を受験してもらい、各自の日本語基礎学力を測定する。内容は、漢字熟語の読み書きと意味を問う設問、ことわざ・四字熟語・敬語など言葉の運用の問題、400字程度の意見文の論述問題などの構成になっており、この結果をもとに各自のレベルを判定してクラス分けを行う。そして、授業スタート時には、全体を1〜5までのレベル別に振り分けて三名の教員でこれを担当し、学生個々の能力に応じた指導を行っていくのである。

また各レベルの授業と並行して、レベル別の「セルフチェックテスト（SCT）」を用意し、分野ごとに選定された教材を学生個々が自主学習したうえで担当教員がチェックすることで、自分の伸ばすべき能力を把握させている。そして、授業やセルフテストの成果として、該当レベルでの十分な学力に自信が持てた際に、「レベルチェックテスト（LCT）」（年間5回程度実施）を受験し、8割以上の合格点が取れば上位レベルに進むことができる。次の段階では、また新たな学習目標を設定して、より高いレベルに向けて段階的に自分の能力を伸ばしていけるシステムになっている。

レベル別授業は、およそ次のような基準で設定されている。なお、この基準は、日本語表現の講座開講時に、レベル別授業の発案者である言語コミュニケーション学科の上田渡氏が設定したものをふまえて、適宜修正を加えたものである。

達成目標と対象者

レベル0 日常生活に必要な基本的な日本語力の習得

漢字・文法・言葉の運用などの基礎力の養成

対象者 留学生（在籍時のみ）

レベル1 自分の考えを2000字程度での確に表現できる力

言葉の意味や運用・待遇表現などの基礎的な日本語力・原稿用紙の使い方

対象者 漢字検定3級以下・日本語検定3級 以下

レベル2

事実文と意見文を4000字程度で適切に書き分けられる力

文体・主語と述語の対応・読点の打ち方など、主題文をまとめる力。

対象者 漢字検定3級・日本語検定3級 程度

レベル3

論理的な構成で文章を4000～6000字程度で論述する力

ブレンストーミングの方法・指示語・接続語の使い方

対象者 漢字検定2級、日本語検定3級 程度

レベル4

段落の内容を書き分けて論理的な構成で6000字程度の意見文を論述する力

パラグラフ・ライティングの方法・主題の設定・段落内容の分析考察

対象者 漢字検定2級・2級、日本語検定2級・2級 程度

レベル5

与えられたテーマや課題を要約して、8000字程度の意見文を論述する力

悪文の訂正・グラフやデータの読み取り・文章要約の方法

対象者 漢字検定2級・準1級、日本語検定2級 程度

レベル6以上 データや新聞コラム・評論文を読んでそれを正確に理解し、

自ら問題設定したテーマをもとに自分の意見をまとめる力

独自性のある発想方法・比喻表現の応用・推敲の方法

対象者 漢字検定2級・準1級、日本語検定1級 以上

これらの達成目標を基本として、それぞれのレベル別授業では文章作成と教員による添削指導を中心に据えて、キヤリア教育の基礎となる日本語コミュニケーション能力のレベルアップを図っている。そして、学生の習熟度の成果として、年間4～5回のレベルチェックテスト(LCT)を実施し、自主学習用として用意したセルフチェックテスト(SCT)の中から8割程度の問題を出題範囲として、200点満点中、160点以上をA合格、150点～159点をB合格、140～149点をC合格と定めている。A合格はそのまま次のレベルに進み、B合格の場合はB合格以上を2回でレベルアップ、C合格ではC合格以上を3回でレベルアップの条件としている。これに加え、前期試験ではレベル3程度・後期試験ではレベル4程度の試験を実施することで、各レベル該当者にはレベルアップの機会を与えている。

そこで、学生個々の達成度を示すデータとして、以下に過去3年間のレベル別授業受講者のレベルアップ率を示してみたい。

平成21年度 受講者72人

レベル	人数	スタート	LCT①	LCT②	LCT③	LCT④ (数字は回数)
レベル総人数推移						
L 0	0人					
L 1	11人		8人	8人	4人	2人
L 2	24人		13人	8人	7人	3人
L 3	20人		27人	29人	26人	27人
L 4	14人		10人	11人	16人	16人
L 5	3人		13人	13人	8人	8人
L 6	1人		1人	3人	11人	14人
L 7	1人		1人	0人	0人	2人

レベルアップ 段階数

L5 (3人)	2段階	2人	1段階	1人	0段階	0人
L4 (14人)	2段階	13人	1段階	1人	0段階	0人
L3 (20人)	2段階	10人	1段階	10人	0段階	0人
L2 (24人)	2段階	5人	1段階	19人	0段階	0人
L1 (11人)	2段階	6人	1段階	4人	0段階	1人
全レベル累計	2段階	38人	1段階	35人	0段階	1人
アップ率		(52%)		(47%)		(1%)

平成22年度 受講者69人

レベル 人数

スタート

LCT①

LCT②

LCT③

LCT④ (数字は回数)

レベル総人数推移

L7			0人	3人	3人
L6		3人	4人	7人	14人

アップ率	全レベル累計	L1 (8人)	L2 (21人)	L3 (19人)	L4 (17人)	L5 (4人)
	2段階	2段階	2段階	2段階	2段階	2段階
(47%)	33人	4人	7人	4人	15人	3人
	1段階	1段階	1段階	1段階	1段階	1段階
(43%)	30人	4人	14人	9人	2人	1人
	0段階	0段階	0段階	0段階	0段階	0段階
(10%)	6人	0人	0人	6人	0人	0人

レベルアップ

段階数

L0	L1	L2	L3	L4	L5
1	8人	21人	19人	17人	4人
	6人	22人	18人	10人	10人
	3人	11人	29人	8人	14人
	2人	13人	31人	7人	6人
	1人	6人	28人	12人	5人

平成23年度 受講者62人

レベル	人数	スタート	LCT①	LCT②	LCT③	LCT④
L0	5人	0人	0人	0人	0人	0人
L1	4人	8人	6人	4人	2人	5人
L2	14人	3人	4人	4人	5人	5人
L3	15人	26人	21人	6人	5人	5人
L4	15人	12人	10人	4人	2人	2人
L5	9人	5人	3人	5人	9人	9人
L6	1人	8人	8人	8人	4人	4人
L7	1人	1人	0人	1人	1人	5人
レベル総人数推移						

レベルアップ
段階数

L5 (9人)	2段階	6人	1段階	3人	0段階	0人
L4 (15人)	2段階	12人	1段階	3人	0段階	0人
L3 (15人)	2段階	13人	1段階	2人	0段階	0人
L2 (14人)	2段階	12人	1段階	2人	0段階	0人
L1 (4人)	2段階	1人	1段階	2人	0段階	1人
L0 (5人)	2段階	3人	1段階	2人	0段階	0人
全レベル累計	2段階	47人	1段階	14人	0段階	1人
アップ率		(76%)		(23%)		(1%)

このデータをもとに各レベルの達成度を考察してみたい。

レベルアップ率では、平成21年度は全レベル累計として、2段階アップが38人でアップ率52%、1段階アップが35人で47%、0段階が1人で1%であった。平成22年度は2段階アップが33人でアップ率47%、1段階アップが30人でアップ率43%、0段階は6人で10%であった。平成23年度は、2段階アップが47人でアップ率76%、1段階アップが14人でアップ率23%、0段階は1人で1%であった。(いずれのデータにも、留学・休学・退学者の数は含まれていない)

2段階アップを達成目標とすれば、22年度は全体の5割弱とやや低い数字だが、23年度は7割が達成しており、1段階アップ者と合算すれば、2年間ともに約9割が自分のレベルからアップしている結果となる。

次に、3年間のレベルごとのアップ率をまとめてみた。

レベル	累計人数	2段階	1段階	0段階	2段階アップ率
L5	16人	11人	5人	0人	69%
L4	46人	40人	6人	0人	87%
L3	54人	27人	21人	6人	50%
L2	59人	24人	35人	0人	40%
L1	23人	11人	10人	1人	48%
L0	5人	3人	2人	0人	42%

この統計データによれば、レベル4・5の2段階アップ率が高く、レベル3ではそれが5割程度まで下がり、レベル2以下になるとさらに4割以下にまで下落していることがわかる。このデータを踏まえ、ここにレベル別授業での学生の取り組み姿勢を考慮しつつ、各レベル在籍者の特徴をまとめてみたい。

① レベル上位者の方が下位者に比べて相対的に学習意欲・学習適応能力が高く、800字程度の小論文の論述方法を確実に身につけられ、より実践的で発展的な日本語表現に活用できる力が養われている。

② 一方、レベル下位者では400～600字程度の基礎的な論述文の書き方が身についておらず、1回の試験（LCT）では突破できずに、2～3回目のレベルテストで1段階アップするものが多い。結果として4回のテストで2段階アップするだけの実力が伴っていない場合が多い。

③ 最終的に、4回目のLCT終了時にはレベル中位のL3・4の在籍人数が多数となり、実践・応用的な日本語表現を身につける段階まで到達していない者が半数近くいる。これらの学生に対しては、2年次開講の「日本語表現Ⅲ」における指導を徹底させている。

2 キャリア教育における日本語表現の方法

本学の言語コミュニケーション学科における「日本語表現」の授業では、社会で必要とされる正確で的確な表現力・理解力などを身につけるための文章表現指導が行われており、そこで培われた文章表現能力を、就職活動で必須となる「履歴書・エントリーシート」の書き方や、「小論文・作文試験」、「面接試験」などの指導に直結させている。そこで、今回は就職試験で必須となる「小論文・作文」といった文章表現能力の指導の実践例を示し、キャリア教育における文章表現の役割について考えてみたい。

小論文試験では、履歴書・エントリーシートなどの書類では伝わりにくい学生個々の考え方や、それを裏付ける具体的な経験などを、正確で客観的な文章表現によって読み手（試験官）に適切に伝えるという、総合的な言語コミュニケーション能力が試されているといえる。そこで、まず、以下に就職小論文を書くために留意すべきポイントをまとめてみたい。

(1) 就職作文・小論文はどのようなことを書くのか

就職小論文には、通常、与えられたテーマに応じて、「小論文」と「作文」の二つの文章スタイルがある。

「作文」形式の場合、与えられたテーマを通して、自分の経験から得られたものの見方や考え方を表現し、「自分の個性」を読み手に的確に伝えることを主眼とする。具体的なテーマとしては、「自分の性格」「学生時代の経験」「私の宝物」「私の信念（モットー）」など、学生個々の経験に基いた考え方や意見を述べるのが基本である。つまり「作文」は、主観的な考え方やものの捉え方に基づいた具体的な体験エピソードを通して、自己をPRする文章だといえる。

一方、「小論文」形式では、資料やデータ、または論題が示され、それらに対する情報・知識を活用しながら、自分の意見・判断を論理的に述べることを主眼とする。例えば、論説文や新聞などの内容を要約して自分の意見を自由に述べたり、時事的な話題に対して問題を設定し、自論の根拠・理由を客観的に論じたりするパターンが多い。「作文」「小論文」のどちらの文章スタイルでも、畢竟問われているのは、その人の「人間性（個性）」や「表現能力」である

ことに変わりはないのである。

(2) 就職作文・小論文は何のために書くのか

就職作文・小論文の試験では、一般教養試験や履歴書・エントリーシートだけで把握できない、人柄や考え方などの内面的な資質を見極めるのが目的となる。よって、学生の社会的関心度や獨創性、論理的な思考能力や判断力はもちろん、文章力・構成力といった基本的な文章能力も問われているのである。書き手は、自分の文章をいかに読み手にアピールするのが勝負となるため、文章表現上、最低限、次の3点を厳守しなければならない。

- i 字は楷書で丁寧な、大きく書く（マス目を有効に使う）
- ii 濃い鉛筆を使い、はっきり書く（乱筆・乱文に注意する）
- iii 分かりやすい文章構成をこころがける（段落構成を意識する）

こうした文章表現の基礎が前提でなければ、内容がいかに優れたものであっても、採点者に読まれることなく評価の対象外となる。そもそも文章表現とは言語を介したコミュニケーションであるため、読み手を意識した文章構成を心がけることが大切である。

(3) 就職作文・小論文のテーマにはどのようなものがあるか

ここでは「作文」のテーマとして多く出題されるものを挙げてみたい。(なお、この分類は、本校キャリア支援室の上島礼子氏の作成した資料を参考にしてまとめたものである。)

I 自分自身について述べる

長所・短所・趣味などの自分の性格や性向を正確に把握して、将来や人生に対する展望が具体的に描かれているかといった内容を通して、その人の人柄や人生観、人生に対する意欲や価値観を見ようとするものである。

〈過去の出題例〉「私の性格」「私の抱負」「私の夢」「私の生き方」「私の将来」「私の宝物」「私の信条・モットー」
「私の大切な言葉」「私が最も関心があるもの」「自己PR文」

II 学生時代について述べる

学校生活における学業・行事・クラブ活動・課外活動・友人関係などから、その人がどれだけ有意義な学生生活を送ってきたのか、また、目標に向けてどれだけ頑張ってきたのかを把握することが狙いである。これらを通して、集団生活のなかでの適応性、社会人としての資質などを見ようとするものである。

〔過去の出題例〕「学生時代に最も印象に残ったこと」「学生時代に得たこと」

「私の学生生活」「学生時代に最も熱心に取り組んだこと」

「学生生活で学んだこと」「ゼミの研究課題について」

Ⅲ 社会人としてどうあるべきかを述べる

社会人としての心構えや志望する職種に対する展望を問うことで、健全で正しい職業意識や勤労観を持つていかどうかをみようとするもの。自己分析と企業分析が明確にできており、しっかりとしたビジョンや心構えを持つて職場に入ろうとしているかを述べるのが肝要である。

〔過去の出題例〕「社会人としての抱負・心構え」「私の職業観」「私の就職活動について」

「当社を志望する動機」「〇〇業界で働くためには」

「サービス業で必要なことは」

Ⅳ 私に影響を与えた人物や出来事について

影響を与えた人物、魅力ある人物、尊敬する人物などの人物について問うものや、影響を与えた言葉や書物などの作品について述べさせることで、その人の人間観や感受性、物の見方や人間性をみようとするものである。

〔過去の出題例〕「私の恩師」「私の親友」「私にとっての家族とは」

「一冊の本」「印象に残った映画」「心に残る言葉」

V その他（随想・感想・印象文）

社会で起こっている問題や事件・世相などについての見方を尋ねることで、ニュースや新聞に常に目を通して
いるかを確認し、社会問題に対する関心度や考え方、物事に対する感受性や思考力を見ようとするものである。

また、一枚の写真や絵を見て感じたことなどを自由に書かせるタイプの創作問題もある。

〈過去の出題例〉「最近のニュースや新聞で印象に残った出来事」

「現代の世相・社会状況について」「男女同権社会について」

「最近、気になる人物は誰か」「手紙文を書く」

また、「小論文」的なテーマとしては、国内外の政治・経済、社会と生活、労働と福祉、自然環境、科学技術と教育文化などが挙げられる。そこから具体的にテーマが絞られて、「高齢化社会」「携帯電話」「ワーキングプア」「裁判員制度」「いじめ問題」などの形で出題される。ここでは自分の意見・主張の独創性だけでなく、その前提として出題テーマに対する最低限の知識や時事問題などの社会への関心度が試されることにもなる。

さらに、「正義」「時間」「自由」「平和」「いのち」などの抽象的テーマの出題や、出版社などで見られる「三題話」

（例）（例）ガーデニング・モーターショー・やせ薬 といった、創作文型の出題もある。

〈過去の出題例〉 「高齢化社会を考える」 「ボランティアとは」 「自由と責任」

「環境問題について考えること」 「世界の中の日本」

「スポーツと文化」 「〇〇町を活気づけるための方法」

(4) 就職作文・小論文試験の対策として、どのような勉強法があるのか

作文・小論文対策としては、以下の3点が挙げられる。

i 自己分析シートの作成

自己分析とは、現在の自分を形成している環境や要素などのバックボーンを客観的に分析して、自分自身を認識する方法である。自分の長所・短所や信念、PRポイントを記述して、自己の内面を掘り下げ、自分自身の考え方の根本を把握することが必要である。自分の適性を見極め、志望する職種に必要な適正と照合しつつ、進路を決定していく方法として効果的である。

〈項目例〉過去の自分を掘り下げる 「中・高校生で熱心に取り組んできたこと」



「どんな分野に関心があったか」

「最も影響を受けた人物は誰か」

「幼いころの自分はどんな人物だったか」

現在の自分を知る

「自覚する長所・短所」

「学校生活で何を学んだか（得意科目・専門分野）」

「アルバイト経験から得たもの」

「サークル活動・課外活動への取り組み」

未来の自分への展望

「五年後・十年後の自分」「将来の夢」

「社会人としての心構え」

「どのような職業観を持っているか」

ii 時事ニュースに通じる

就職作文・小論文や面接・討論などでは、「最近のニュースや新聞記事で印象に残ったことを述べなさい」と問われることが多い。こうした時事問題に詳しくなるためには、新聞・ニュース・インターネット記事は常に目を通す習慣をつけ、関心のある記事や項目、コラムなどは必要に応じてスクラップすることが必要である。（キヤリア教育における新聞の活用方法については、別稿で改めて論じたい。）

iii 第三者に文章を添削してもらおう

自分の文章の課題を知るには、第三者の眼による文章指導が必要である。文章表現の評価基準に即した書き方ができているか、原稿用紙の使い方は適切かなど基礎的なことも確認しておく必要がある。おおよそ次の点が評価基準となる。例えば、主題に合った内容となっているか、書かれた内容に統一性はあるか、文章構成が適切にまとめられているか、正確で適切な日本語表現で書かれているか、などのチェックポイントをふまえておきたい。

3 就職作文・小論文指導の実践例

ここでは、前章で示した小論文・作文指導の実践例を挙げてみたい。本学2年次開講の「日本語表現Ⅲ」における小論文・作文演習での添削例を提示して、その成果と問題点を考察したい。

1章で触れたように、1年次には「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」のレベル別授業において、意見文を中心とした小論文（400～1200字程度）の論述演習の指導を行っている。ここでは、文章構成の基本として、序論（問題提起）・本論（自分の意見と根拠を示す）・結論（自論のまとめと展望）の3段落構成を習得させ、各レベルにおいてパラグラフ・ライティングの書き方を徹底している。

2年次には、この論述スタイルを発展・応用させる形の論述指導を実践している。特に採用試験の小論文では、読み手に強い印象を与える書き出しが必要となるため、主題にあった自分の主張を効果的に示すことが必要となる。よ

って、主題（主張・意見の核心）から書き始めるなどの工夫が求められるのである。主題の位置による構成方法としては、次のスタイルがある。

頭括式 主題を提示し、その論証や説明を述べる。

尾括式 論証や説明をしてから、主題を導く。

双括式 主題を提示し、論証や説明を加えて、再び主題を提示する。

これらの文章形式は、書き手の意図を明確に提示する方法として有効であり、中心的主題を読み手に強く印象付ける方法だといえる。なかでも「双括式」は、主題を最初に提示した上で、最後にその主題を発展・展開させるスタイルであり、就職作文・小論文では、最も効果的に書き手の意図を読み手に伝える方法だといえよう。

今回は、こうした論述形式をふまえた小論文指導の指導と実践例を紹介したい。前章で掲げた作文出題傾向を改めて示してみる。

- I 自分自身について述べる
- II 学生時代について述べる
- III 社会人としてどうあるべきかを述べる
- IV 私に影響を与えた人物や出来事について

V その他（随想・感想・印象文）

この中でも、特に出題率の高いⅠ～Ⅲまでのテーマを採り上げた作文例を示したい。

I 自分自身について述べる

テーマ 「私の信念（モットー）」 制限時間35分・字数400字

まず、テーマが出題されたら、書き手は文章の構想を練ることに心を砕くことが必要である。文章構想は決して頭の中だけで行わず、構想メモを書き連ねながら文章の骨格（アウトライン）をまとめることが重要である。ここでは簡単にこのテーマでの構想メモを考えてみたい。

1 まず「自分の信念・モットー」を思いつくまま挙げてみる。

発想 信念とは？ 1 人とは笑顔で接する

2 他人の気持ちを第一に行動する

3 何事にも落ち着いて対処する

4 何事にもあきらめずにやり抜く

2 最も自分らしさをアピールできる信念を決定する

←

決定 2 「他人の気持ちを第一に行動する」

3 信念について考えられることを、自分自身に問いかけて、それに対する答えを書き出してみる。

なぜ大切にしているのか？ ↓現在の自己形成にどう影響を与えているか

どんな経験から実感できたか？ ↓過去の自分の体験・エピソードを考える

私の考えや行動にどう表れているのか？ ↓具体的な場面を挙げて裏付ける

どんな点がアピールできるか？ ↓アピールポイントを入れてみる

今後の自分にどう活かしていきたいか？ ↓未来の自分の理想像・社会人としての自己の姿

4 段落構成を図にしてみる

1 段目 自分の信念とは〇〇である。それは〇〇（の経験）によって得られた

2 段目 エピソード（2つあれば段落を変える）

高校生活・課外活動・部活動・アルバイトなどの体験を紹介しながら、

信念の裏付けとなる行動やきっかけとなった出来事をまとめる。

その信念が自分にどうプラスになったか。成長できた点は何か。

3 段目 今後の自分にどう活かすか。（社会人としての自分のイメージ）

信念をもとにしてどんな自分が形成できるか。

5 原稿用紙に書き始める

構想メモは箇条書きで、なるべく具体的に、さまざまな角度から自分の考えの根拠となる事柄を書き連ねる。細かな表現までこだわることはない（構想メモは下書きとは異なる）。アウトラインは文章の骨組みとなる部分なので、全体構想の8割が固まればよい。アウトラインができたなら、はじめて原稿用紙に書き始める。

学生の作文例①（※作文例は、誤字・句読点の訂正以外は、原則、原文通りとした）

「私の信念」（K・R）

私の信念は、自己犠牲の精神を持つことです。それは自分が相手にしたことによって、相手が喜んでもらえることが何よりもうれしいからです。

高校時代の友人に、精神面が弱く、ちょっとしたことでもパニックを起こしてしまう人がいました。初めは接し方がわからず、苛ついてしまうこともありましたが、これではいけないと感情を抑え、相手の気持ちを第一に考えて接するようになりました。その後は、感情を抑えることに抵抗が無くなり、相手にとってプラスになることならば、自分にとって多少マイナスになることでも進んで行うようになりました。相手が落ち着いた後、笑顔でお礼を言ってくれることがとてもうれしかったです。

この経験から、人のためには時に我慢をすることも大切だと学びました。今後は、身近な人たちに対してだけでなく、普段の生活などさまざまなことを通して、行動していきたいと考えます。

講評 この文章は、冒頭太字の信念の内容は的確に述べられているが、それを裏付けるエピソード内容となつておらず、「自己犠牲の精神」とのかかわりが薄いのが欠点である。また、結末では今後の展望が述べられているものの、普段の生活のどのような場面で具体的に活かしていくのかが曖昧で、漠然としている。

評価 主題 C+ 内容 B 構成 B+ 表現 B 65点

学生の作文例②

「私の信念」(K・N)

私の信念は、常に周囲の人への感謝の気持ちを忘れずに生活することです。現在、私が充実した生活を送れているのは周囲の支えがあつてのものだからです。

私は、高校生の時に長期入院を経験しました。治療は簡単ではなく、辛いことが多くありました。しかし、どんな時でも、家族を始め、友人、看護師の方々、主治医の先生がサポートしてくれました。特に看護師の方々は、朝晩付きっきりで私を励ましてくれたのです。忙しい業務の間を縫つて、幾度も散歩に連れ出してくれたことは今でも心に残っています。こうして、多くの方々を支えがあつたから、私は病気を克服でき、無事退院することができました。

私たちは常に多くの人に囲まれて生活しています。そのつながりは、社会に出ればさらに大きくなります。その中で生活するには、周囲への配慮や心遣いが必要不可欠です。人への感謝を持ち続け、よい人間関係を築きたいです。

講評 信念の内容が明確に述べられており、過去・現在・未来の自己の姿がエピソードを通じてよく伝わってくる。

また、エピソードの内容が具体的であり、書き手の人柄が伝わる文章となっている。

評価 主題 A + 内容 A 構成 A + 表現 B 90点

II 学生時代について述べる

学生の作文例③

課題 「学生生活で成長できたこと」について述べなさい。 制限時間45分・字数600字〜800字

「学生生活で成長できたこと」(M・A)

私は学生生活で、さまざまなことに挑戦することの大切さを学びました。

私は短期大学に入学し、初めて資格を取得しました。最初は、試験を受けても落ちることが嫌で、あまり積極的に受けようと思っていませんでした。受けるときも、人に勧められて受けていました。しかし、少しずつ受験して合格するにつれて、資格を取得することが嬉しく、楽しさを感じるようになりました。自分から行動しなければ、得られるものも得ることはできません。そのため、自分から積極的に資格試験を受けるようになりました。資格を取得するために、その資格の授業を受講しました。そのおかげで、短期大学入学後、多くの資格を取得することができました。

このことから、自分から積極的に行動しなければ、よい結果は出ないということがわかりました。また、新しくさまざまなことに挑戦することの大切さを学ぶことができました。今後は、また新しい資格を取得するだけでなく、今よりも上級の資格を目指して努力していきたいと考えています。また、人が一人でできることは限られており、一度に多くのことをこなそうとしてもやり切れません。新しいことに挑戦することも大切ですが、先ず、自分の役目をつ一つ丁寧になしてから、新しいことに挑戦したいです。そして、新しく挑戦することにも、適当にせず努力を怠らずに、最後まで丁寧にやり遂げたいと考えています。

講師 資格の内容が具体的に述べられておらず、感情的な表現に止まつてる点が減点材料である。また、資格習得を

通して積極的にどのような面が成長できたのかが述べられておらず、自己PRの弱い内容となっている。

評価 主題 C 内容 C 構成 B 表現 B 60点

学生の作文例④

「学生生活で成長できたこと」 (K・M)

私は書道部に所属しています。部活動で得たことは、努力する大切さとあきらめない精神です。また、部長として部員をまとめる責任感や協調性の大切さを実感することが出来ました。

展覧会に出品する作品を書いた時、自分の思うような表現をすることができませんでした。しかし、顧問の先生か

らのアドバイスで改善すべき点を試行錯誤するうち、結果、展覧会で入選することができました。この体験から、一つのことに集中し試行錯誤しながら取り組み、より良いものにするこの重要性を学びました。そして、努力することの大切さとあきらめない精神を実感しました。また、部活の後片付けで早めに声をかけて片付けをしていたときに、顧問の先生に気が付くと言われ、嬉しかったことがあります。部員の皆も協力してくれて、よい雰囲気で部活動が行えました。この体験から、部長としての責任感と強調する大切さを実感できました。

こうした体験を活かして、共同作業の場ではさまざまな人と団結し、目標に向かって共に試行錯誤しながら取り組んでいきたいと思えます。困難なことがあっても、最後まであきらめずにやり遂げる努力をしていきたいです。また、人をまとめる立場になったら、リーダーシップを発揮して気の利く行動を取れるようにしたいです。独りよがりにならないように周りに目を配り、思いやりを持って行動したいと考えています。

講評 部活動を通して成長できた点が、エピソードで具体的にまとめられている。そこから、自分が精神的にどれだけ成長できたのかの確に述べられており、今後の自分にどう反映させるのかまでまとめられている。書き手の人柄と個性がよく伝わる内容である。

評価 主題 A 内容 A 構成 B+ 表現 A+ 95点

Ⅲ 社会人としてどうあるべきかを述べる

課題 「社会人としての抱負」 制限時間45分・字数600字～800字

学生の作文例⑤ 「社会人としての抱負」(U・M)

私の社会人としての抱負は、自分に与えられた仕事に責任を持つて最後までやり遂げることです。また、学生時代に学び得た知識を最大限に活かし、自らの仕事に反映させていくことも社会人としての資質だと考えています。

私は、地元の図書館で蔵書検索のアルバイトを経験したことがあります。書架から本を数冊ずつ取り出し、カウンターのパソコンで確認して、再び書架に戻すという作業でした。司書の方と私を含め、数人のアルバイトで数万冊の本を三日間で処理しなければならず、とても大変でした。特に気を使ったのは、確認し終えた本を戻すときです。正確な場所に戻さなければ、本の所在地が不明になり図書館だけでなく、一般の利用者にも迷惑をかけてしまうからでした。一見すると単純な作業でしたが、周囲との協力がなければやり遂げることが難しかったと思います。また、点検をしていると、本来の場所とは異なる分野に紛れた本も見つかります。そんな時、短大で学んだ図書館の知識を活かし、自主的に反映させて作業をスムーズに運ぶことができました。

この経験から私は、自らの仕事は責任を持つてやり遂げることと、臨機応変に知識を活かしていく重要性を学びました。これからは社会人として、図書館に限らず責任ある立場であることを自覚し、学生生活で得た知識や体験を最大限に活かしていきたいです。

講評 図書館でのアルバイト経験を活かし、社会人として必要な資質を述べた上で、社会人として自分がどうあるべきかをイメージできる文章となっている。また、双括式の論述方法が身につけている文例である。

評価 主題 A＋ 内容 A 構成 A＋ 表現 B 90点

学生の作文⑥ 「志望動機書」(A・R)

私が御社を志望する理由は二つあります。一つ目は精神的な配慮に基づいて仕事ができる葬祭という業界に携わりたいと思ったからです。二つ目は、昔ながらの儀礼文化だけでなく、呉服を通して日本の文化を守る御社の姿勢に魅力を感じたからです。

私が中学三年生のことでした。友人の肉親が亡くなったとき、私はどんな言葉をかけてあげたらいいのか、どんな態度で接すればいいのか全く分かりませんでした。何より精神面で友人を支えてあげることができなかったのが悔しかったのを今でも覚えています。そのため、先日の説明会の際、社員の方のお話が印象に残りました。それは、お客様のお気持ちの整理がづくようにと、時間を空けて改めて訪問し直すなどの配慮をしていることでした。事務的な仕事ではなく、精神的な配慮に努めている姿勢に感銘を受け、自分もそんな仕事に携わっていきたいと思うようになりました。

また、私は以前から日本の伝統文化に興味があり、短大では津軽三味線部に所属しています。年々、伝統文化の継

承者が減少していくなか、伝統儀礼だけでなく呉服を減点とする御社でなら、伝統文化に直接関わっていけないのではないかと感じました。それが志望理由です。

~~~~~  
御社で何ができるのかはまだわかりません。しかし、図書館司書実習や部活動で培ったコミュニケーション能力を活かせるように、何事にも積極的に取り組んでいきたいと考えております。中学生の時に感じたあの悔しさをバネに、地域の方々に親しまれるように努めていきたいと思えます。

講評 志望する業界の業務内容をふまえ、そこに自分の適正を求めようとする方向性が見える。実体験をもとにして業界になぜ関心を抱いたのが、具体的に述べられている。入社後の自分の職務内容に具体性がない点は減点材料である。

評価 主題 A 内容 A+ 構成 B+ 表現 B 8.5点

以上、「日本語表現」の講座において指導した作文の添削例を示してみた。ここに挙げた指導実践例は授業の中の一例に過ぎない。今後は、「日本語表現」のレベル別授業に対応した指導方法や、履歴書、エントリーシートでの自己表現方法・新聞の活用法などを採りあげ、キャリア教育における文章表現の方法を考えていくつもりである。

注記 論文中の数字は、便宜上、算用数字を用いている箇所がある。

